

敗戦で一転 見えた真の民衆の姿

朝日新聞 2015年3月19日

(太字は引用者による。)

——三重の特攻基地に配属されたのが1945（昭和20）年の3月です。任務は？

予科練（予科練習生）上がりの特攻要員を訓練し、軍令部から届く「明日、何人出せ」という命令に応えるのです。翌朝の10時までと求められるので忙しい。鹿屋（鹿児島県）の出撃基地に送られるのでしょうか。隊員を集めて「こういう命令が来てるが志願者はいるか」と尋ねると、全員が「自分を選んで下さい」と申し出るんです。

——本当に自発的に志願するんですか。

隊員たちは**こんなところで爆撃を受けて死ぬより**、と思っているんです。予科練出身でも滞空時間千時間というベテランの飛行士がいたので、**どうせ死ぬなら**、自分の技術を使って**華々しく死にたい**と。**だからみんな喜んで行くんです**。

追い詰められてますから。

——志願者から選抜するわけですか。

そうです、僕が選んだ。選ぶ基準はとても簡単で、まず両親が健在な者、次に兄弟が3人以上いる者。逆じゃないかと言うかも知れませんが、家を守ればいいという家父長制の時代ですからね。両親が健在なら、また子どもを生産できるかもしれないし、3人以上子どもがいるなら家は続くだろうというわけです。

送り出したのは二十数人いますかね……。戦争が終わって、彼ら全員の故郷に手紙を出しました。不時着して生き残った者もいて、懐かしがって訪ねてきてくれたこともあります。

——やはり責任をお感じになりますか。

僕ら将校は、送り出す権限を持ってましたからね。送り出された側じゃない。上の命令があったとしても言い訳にならない。直接命令したのは私ですから、その責任はあります。

伊勢湾はずいぶん爆撃を受けました。連絡のために対岸の鳥羽にある本部へボートでこぎ出すと、米軍機に発見されてバリバリと射撃を受けるんですよ。もうアウトかなあとと思うと、背中や首が痛くなってくる。当たっていないのに、精神的にやられたような感覚になるんです。ああいう体験は、まあ、二度としたくないね。

——敗戦を迎えたときは、どんなお気持ちでしたか。

将校が集められ、ラジオを聴かされました。これは戦争が終わったのだなとわかったが、誰も泣きませんでしたね。

隊に戻って隊員に伝えると、みな関（とき）の声ですよ。**万歳とは叫ばないが、ワーッと関の声をあげて喜んだ**。荷物をまとめて即日帰郷してよろしいという命令が出たんですが、そうすると、**よくもこんなに隠しておいたなというくらい、あちこちから物資が現れるんです**。下着やら服やら日用雑貨やらが、床下や天井裏から出るわ出るわ。朝まで寝ていたベッドのカバーまで切り裂いて持ってっちゃう。

それが民衆の姿なんです。**国家だ、忠義だ、滅私奉公だなんて言ったって実質はこれなんだ**。（聞き手・樋口大二）